

1 学年だより

令和3年10月12日(火)

夢の宅配便

1 年学年主任

水野 島茂治

一人一人が、協力して合唱を作り上げよう!

火曜日の練習 10月12日

① 場所
リコー 教室
パート パラダイス室
テノール 第二音楽室 (6本)

② 故
リコー 教室で
+ テノール 合わせ

×それは毎回する

パート練習

歌詞を
おぼえる!!
(ふふ)

2組の黒板には、各パートの練習の反省が毎日貼られている。また、各パートの反省をもとに、本日の練習場所と練習のポイントが書かれている。放課後に、各リーダーが合唱を完成させるために積極的に動いていることがわかる。

よかったこと | テノール |
おあはれを
たせた。
ふさけた(昼)
最後のうううのと3分
はまかいかな
うううのあと
今日をハッキリ発音しよう。

テノールの昨日の練習の反省がまとめられている。朝登校して、各パートのメンバーが昨日の練習の良かったことと悪かったことを確認して、今日の練習に生かしていている。

今回の合唱の取り組みは、練習時間も充分にとれなく、合唱を仕上げるのは厳しい面もありますが、最後まで、自分たちのできる取り組みをしっかりと行って、三の丸ホールのステージに立ってほしいと思います。パートリーダーや指揮者、伴走者は、それぞれのグループの活動を反省して、明日の練習につなげられるように働きかけましょう。頑張ってください。そして、クラスの一人一人は、クラスの活動に全力で協力していきましょう。

人は、自分の活動で周りの人に協力してほしい場面がよくあります。ですので、自分も他人に協力できる行動がとれるようになりましょう。やるときはやりきる!各クラス頑張ってください。

連載小説 第二編

「キヨさんの小さな小さなダイヤの指輪」

第7話…母へのプレゼント

「喜代治！念願のウルトラマシンだね！早く買いに行っちゃい。買い終わったらファミリーレストランでご飯を食べて帰ろうね。お母ちゃんは、時計売り場のあたりを見てるから買ってきたさいね。」と母は私の肩をポンと叩いた。

私は、おもちゃ売り場でウルトラマシンを買う前にもう一度、カバンから横浜銀行の封筒を出して中身の二千円を確かめた。手の切れるような新札の二千円があった。42日間の私の頑張りを母が認めてくれていることがこの新札から伝わってくる。二千円の新札を見ると、頑張った自分が思い出された。いつの間にか右手の人差指の内側に簪を使ったことによるマメが出来ていた。憧れのウルトラマシンを買うのに、なぜか、二千円を遣うのが勿体なく感じた。頭をなでてくれたお母ちゃんのご褒美を、一瞬に使って消えてしまうのが少し寂しく思えた。そっと大切にお札を封筒に入れなおして、おもちゃ売り場に直行した。

おもちゃ売り場に行くとなんとウルトラマシンは売り切れていた。「残念でしたね。人気があるので取り寄せするには、お母さんかお父さんと一緒に来てください。取り寄せは、大人でないと出来ないの。」と女性の店員が説明してくれた。予想もしない展開に困惑したが、二千円を使わなくてすんだので不思議に安心もした。母を探すと、貴金属売り場にいた。貴金属売り場のガラスケースの中を興味深そうに見ていた。蛍光灯で明るく照らされたガラスケースの中で、ダイヤモンドの指輪やオパール指輪、サファイヤやルビーなどが美しく輝いていた。白い手袋をして、女性の店員がガラスケースの中のルビー指環を取って、母の前に置いた。母が、指輪をそっと指に入れて、「丁度いいわね」とか言いながら指を揃えて伸ばして、いろいろな角度に手の甲を動かしては、指輪の輝きを楽しんでいる。母の表情が本当に嬉しそうで、私まで嬉しくなった。店員が「奥様、こちらの指輪もお似合いだと思います。」とキラキラと光るダイヤモンド指輪を出してきた。母が「素敵ですね。」とつぶやいて、指にそっと通した。

私自身、生まれてはじめて、こんな近くでダイヤモンドを見た。ダイヤモンドを見ているうちに、きれいに輝くダイヤを母の指につけてあげたいと思った。いつも、何も装飾品をつけない母がダイヤの指輪をつけたらどんなに喜んでくれるのだろうかと思った。「お母ちゃん、8月25日の誕生日にお手紙しかあげなかったから、プレゼントしようかな」と母に向かって話した。「えっ！何をプレゼントするの？」と母がキョトンして答えた。「指輪だよ！ダイヤモンドの。小さくてもいいかな。そこの隅のダイヤモンドの指輪をお母ちゃんに買ってあげる。」と右隅の小さな小さなダイヤモンドの指輪を指差した。「この指輪？、喜代時はウルトラマシンを買ったでしょ」と母が微笑んで尋ねた。「ウルトラマシンは売り切れちゃって、もうないんだって。取り寄せも出来ないと言っていた。だから、買うのを諦めたんだ。」と私は母に嘘の説明をした。「お母ちゃん、この小さなダイヤの指輪はちょうど2100円だから、買えるよ！」と嬉しくなって言った。「喜代治、これは21000円だよ。一桁違うよ」と母が笑った。「そうなの、でも、足りない分は大人になって働いて渡すから、買ってあげる。この掃除のお金で足りない分は大人になって払うから、お母ちゃんに、誕生日にダイヤ買ってあげたい。」と少し悲しくなって目を赤くして母に話した。母は目をつぶって少し考えた後に口を開いた。 つづく